

題目：関係流動性が社会的排斥の原因帰属に与える影響
—社会生態学的アプローチによる検討—

氏名：関篤尋

指導教官：結城雅樹

いじめ問題や、友人からの無視、仲間外れといった他者からの拒絶や排斥は、私たちの日常生活でよく見られるが、その拒絶や排斥をどのような理由に求めるのかは人々によって様々であろう。本研究では、こういった他者からの拒絶や排斥の原因をどこに求めるか(=原因帰属傾向)が、人々を取り巻く社会環境によって異なるのではないかと考え、社会生態学的アプローチの観点から、関係流動性(Yuki et al., 2007)の違いによって、被排斥の原因帰属傾向に違いが見られるか検証した。

関係流動性とは、ある社会、または社会状況に存在する、対人関係の選択肢の多さのことである(Schug, Yuki, & Maddux, 2010; Yuki et al., 2007)。高関係流動性社会では、新規他者との関係形成機会が多く、より利益が得られる社会的価値の高い相手との関係形成を誰もが望んでいる。よって、社会的価値の高い人は関係相手として選ばれやすいが、一方で社会的価値の低い人は選ばれにくい、というように、対人関係の選択する基準が人々の社会的価値の高さによって規定されやすい。よって、高関係流動性社会では他者からの排斥の原因を被排斥者の社会的価値の欠如に求める傾向が高いと考えられる。一方低関係流動性社会は、対人関係の代替選択肢が少ないため、人々が既存関係相手との関係を解消するのは高関係流動性社会と比較すればまれだが、現在の関係相手と付き合い続けることで発生するコストが、その人と関係を解消した時のコストよりも大きくなれば、人々は既存の関係相手との関係を解消すると考えられる。そのような時とは、既存関係相手が、利己的で非協力的な振る舞いをしたり、集団の規範や秩序を乱したりするような時、つまり特定関係が悪化するような行動をとる時ではないか、と考えられる。よって、低関係流動性社会では他者からの排斥の原因を被排斥者の特定関係悪化行動に求める傾向が高いと考えられる。

以上のことを検証すべく、①日本人・アメリカ人を対象に場面想定法を用いた社会状況比較研究、および②実験室実験による日米国際比較研究を行った。研究①では、おおよそ予測と一貫した結果が見られ、高関係流動性状況では社会的価値欠如に、低関係流動性状況では特定関係悪化行動にそれぞれ被排斥の原因を求める程度が高かった。今後の展望としては、国内の関係流動性が異なる地域間での比較実験、また排斥者側の視点に立った実験検証を提案する。